

学生時代と図書館 42

専用空間のありがたみ

羽根田 知子

学校付属の図書「館」があるというのは大学からで、高校までは図書「室」と言っていたと思う。少なくとも私が通っていた学校には独立した建物としての図書館はなかった。たとえあったとしても、その頃の私には、放課後や休暇中に利用するなど思いも及ばぬことであつたらう。「本」との関わりでは、幼少時代から思い出も多く、その記憶も鮮明であるが、「図書館」となると大学以前の思い出はほとんどない。

とても小さなきっかけでドイツ語をやりたいと思うようになり、京都外国語大学のドイツ語学科に入学した。授業が始まって2ヵ月ぐらい経った頃だったと思う。文法の先生が授業の中で関口存男の『冠詞』を紹介して下さった。定冠詞篇・不定冠詞篇・無冠詞篇の3巻から成る本である。授業の後、もう少し詳しく聞きたいと思って先生を訪ねると、図書館にもあるはずだが、そうすぐに読み切れるものではないからと、ご自身のものを暫く貸して下さることになった。まだ1年生でありよく理解できなかったが、それでも読み始めると、とてもおもしろく、どうしても所有したくなった。ところがそれを購入しようと決心した時はちょうど値上がりしたところで、学生の私にはたいへん高いものになっていた。後日、別の用事で先生を訪ねた折、何気なくその話をすると、自分は新しい版の方が必要だから、あれでよければ譲ってあげようとして提案して下さった。新しい版といっても改訂版ではなく単なる増刷である。お借りした古い方はまだ新品同様の御本だったのに、それを古本なみの値で譲って下さった。

この本は私のドイツ語研究の出発点である。やたら分厚く、講義で話すような書きぶり、一旦熱中するとどんどん読めるが、後でもう一度調べる段階になると、どこに何が書いてあつたか探す

のも一苦労というような本である。理路整然と展開される論文や、索引の整った参考書とは程遠い。結局、何度も繰り返し読むはめになったが、結果的にはそれ



が良かった。『冠詞』以外にも図書館には、あの偉大にしてユニークな関口氏の著書が揃っていた。急いで読む必要はなかった。時間に急かされることなく、じっくり取り組める時間と空間をもてるというのはなんと贅沢なことか。

4年生の時、ある大学より週に1度本学に出講して下さっていた先生とご縁があって、卒業後はその大学院に進学した。キャンパスの広さと図書館の大きさに驚いた。けれど、なんでも大きければ良いというものではない。私など、あまりに大きすぎるとそれだけで疲れる。入学後、図書館利用の説明があり、検索システムの先進性にも感心したが、それ以上に感動したのは、大きな空間の中にも落ち着ける工夫が凝らされていることだった。閲覧室には、全部ではないが、3方に囲いのあるライト付の一個一個独立した机があった。長時間に渡る調べものも落ち着いてできる。院生は地下の書庫に入ることができ、その入り口には鞆を預けられるロッカーがあった。書庫にもあちらこちらに机が置かれているので、借り出すほどではないが、何冊か目を通したい時など、落ち着いて読める。また、好みによっては、静かでひんやりとした書庫の机を1日中独占することもできる。借り出せる冊数も期間も学部より増えた。所属する研究科の図書係の先生は、図書館で購入してほしい本はないかといつも尋ねて下さった。このような、大学院あるいは大きな大学なら当たり前のことかもしれないことでも、当時は新鮮で嬉しかったのを覚えている。進路は未知でも、院生がその出発点において研究者になることを前提に扱われているという意味で大切にされることはたいへん有難いプレッシャーである。

はねだ ちこ（講師・ドイツ語学）